

平成30年3月5日発行(毎月5日1回発行)  
第58巻3月号(通巻704号)

# 風土



3

## こけし 売る すり 膝 尼の 涼しさよ

(句集『高蘆』より昭和四十三年作)

この句は「東慶寺」の前書きがあります。鎌倉の東慶寺は臨済宗の古刹で、「英勝寺」という尼寺もあります。そのの尼さんたちの様子を詠んだもので、手ずさびに作った「こけし」を希望があれば拝観者に売っていたようです。おそらく庫裡の縁あたりに「こけし」を並べているのでしょう。買いたい人が現れたので、畳を「すり膝」で近づいたのです。その所作に思わず「涼しさ」を感じ取りました。「すり膝尼」という措辞は桂郎師独特のもので

## 見えぬ 黴 坐して ほとりへ 漂はす

(句集『高蘆』より昭和四十三年作)

これは梅雨時の「七畳小屋」を詠んだものです。竹藪の中の、壁が隙間だらけの小屋です。湿気は生半可ではありません。いたるところに黴がはびこります。座布団にも「見えぬ黴」が付着しているのです。坐ったとたんにかび臭い匂いが浮遊し始めました。「ほとりへ漂はす」に梅雨に辟易する桂郎師がいます。

いのちまた燃ゆる色なり初明り

(句集『心後』より平成四年作)

「初明り」は元日の朝、東の空にほのぼのとさしてくる曙光で、一年の始まりの明りです。冷気の中のその曙光に器師は「いのちまた燃ゆる色」を見ているのです。すべての命の根源は太陽が育んだものです。地球の命の始原まで意識を遡らせ「初明り」を反芻しています。ちなみに桂郎師に「初明りもとより障子明りなす」(句集『四温』)があります。この師弟の「初明り」の捉え方の違いが垣間見えて興味を覚えます。

ふるさとやキリストのごと田螺ゐて

(句集『心後』より平成四年作)

器師の実家は鶴川の農家です。桂郎師の暮らしたところでもあり、たびたび訪れています。田の溝をよく見ると「田螺」がいます。じっと見入るうちに、器師はなんと「田螺」を「キリスト」に喩えました。おそらくその形態からではなく、「ふるさと」のやさしさや包容力の象徴として「キリスト」が浮かんだのです。

初

曆

南  
う  
み  
を

薄き日を吸ひ尽くさんと冬紅葉

枯草をころがるヌードルのカップ

川涸れて骨の自転車骨の傘

田の氷ペットボトルの腰を抱き

白菜のおのれを締むる霜夜かな

落葉踏む偲ぶこころをはぐくみつ

冬至の日葎の雀弾き出す

百枚の畳のひかる寒さかな

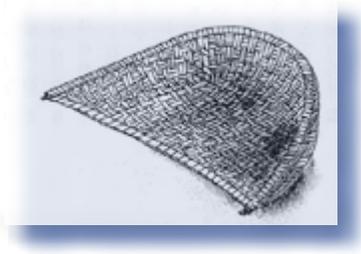
、F氏を訪ふ

もてなしの色を暖炉の桜櫓

餅搗くと臼に蕈を噛ませけり

煤梁に届かんばかり餅の杵

水鳥の日差しにひらく初暦



# 竹間集

同人作品



小春日

田村すゝむ

片意地は越後生まれぞ冬に入る  
小春日や退屈と云ふ午後三時  
小春日の南無妙法の鯛ノ浦  
「あ、雪が」詩よむ老いの一人言  
京都將軍平大舞台にて  
冬夕焼白き京都を手の内に  
利休居士の四百年忌雪椿  
大枯野見えぬ余生へ歩を進め

聖夜

田中佐知子

平飼の卵のぬくみ聖夜来る  
ペットショップの子犬買はれてゆく聖夜  
シヨウインドウの赤いポルシェやクリスマス  
降誕祭木立に透ける街灯  
荒野来る灯の煌々と聖夜かな  
クリスマス満艦飾の海暗し  
搭乗を待つラウンジの聖樹かな

冬紅葉

中村洋子

大炊殿下賀茂神社に火の神祀る十二月  
銀沙灘銀閣寺二句を大海に見つ冬の月  
義政のお茶の井跡や片時雨  
山門法隆寺二句は額縁となる冬紅葉  
冬芽持つ谷崎の墓空くうと寂  
走り根の洞に嵩足す散紅葉  
湯豆腐の湯気の向かうに南禅寺

雪 蛩

橋添やよひ

禪庭の石の眩き雪ばんば  
拈華微笑迦葉に障子明かりかな  
吹き寄せの菓子に手が出る漱石忌  
立ち食ひの討ち入り蕎麦に舌を焼き  
身のうちの喪が抜けきらず十二月  
馴れるとはあきらめること葱きざむ  
白砂盛る向月台や冬の星

ばれ太鼓

浅田 光代

流さるることの寧けさ浮寝鳥  
「大根だき券」買って善女となりにけり  
水鳥の一羽一羽を日の囀ふ  
枯野へと小さき土橋わたりけり  
忘年の一句まはして箸袋  
年送る繁昌亭のばれ太鼓  
赤きものほのと浮きたる味噌雑煮

白

柿沼 盟子

寝かせ置く大根白き夜の厨  
狐火や泉の奥に洞ありて  
鈍色の空に白き日鎌鼬  
沈みをる露地の飛び石霜柱  
笹鳴きや小店に求む書画の額  
伽羅御所の跡に二重の干し大根  
張り詰めし朝に白き冬椿

福 沸 し

高村 令子

仕舞湯へ亡母と亡父来て去年今年  
峽に古る初日まみれの父祖の家  
あるがまま生きて卒寿や福寿草  
初日受く死ぬまで同じ山背負ひ  
ただよひて生きる晩年齋粥  
寝落ちゆく嬰は宝物福沸し  
前向きにと先づは一筆初日記

# 山河集

同人作品



南うみを選

刀鍛冶一打の閃光冴えまさり

大森 尚子

焼刃土一粒の冴え刃紋呼ぶ  
冬天へ大槌小槌の間合ひかな  
関鍛冶の鼻緒の瘦せる師走かな  
山 眠る 鞆 操る 左 腕

袖通す白衣の折り目去年今年

石井美智子

なまはげの荒ぶる午夜の村明り  
なまはげの出刃持ち替へて御神酒汲む  
なまはげの去りしところに福の藁  
夜を走る 裸参りの藁草履

十二月柱時計を掛け直す

布施まき子

硝子戸の中の日射しや漱石忌  
追ひかけて追ひかけられて落葉道

櫛落葉空の高さを楽しめり

書の流儀展

貫之のかな書に出合ふ小六月

鷗外と慶応三年生まれの文人達」展 三句

冬ぬくし鷗外の大き選句文字

鷗外宛子規のはがきに春待つ句

鷗外宛漱石の書簡暖炉燃ゆ

鷗外の詩碑と冬日にぬくみけり

亡き姉の古き英字書漱石忌

池田 光子

どの指も元気勤労感謝の日  
高野豆腐軽くしげれば寒波くる

年の市 二句

裸木に吊る掛軸は富士の山

# 風土独語／南 うみを



道元は道を語らず冬落暉

山田 健太

この句の読みのポイントは「道を語らず」です。例えば親鸞の「浄土真宗」の念仏の伝道布教に比べれば解るでしょう。道元は座禅によつて直接悟りを体得することをすすめました。道は白すから拓くものなのです。「冬落暉」の冷たい輝きが道元の禅を象徴しています。格のある句です。

関鍛冶の鼻緒の瘦せる師走かな

大森 尚子

「関」は鎌倉時代から今に続く鍛冶の町です。作者は鍛冶の様子を目の当たりにし「鼻緒の瘦せる」という言葉を掴まえました。足指に力を入れて刃がねを仕上げる様子がまざと伝わります。読み手をうまく想像の世界に誘導しています。

なまはげの出刃持ち替へて御神酒汲む

石井美智子

この「なまはげ」の鬼は、訪れた家の主から御神酒をふるまわれているところです。「酌む」ではなく「汲む」に、樽から柄杓で汲む鬼の荒々しい所作が想像できます。「汲む」が的確です。

短日や足より暮るるバスのりば

岡 尚

「短日」は暮れが早い。作者はそれを足元に感じています。足元から這い上がる闇に心細さを覚えていきます。足元に焦点を合わせること、作者の心情が伝わってきます。

櫻落葉空の高さを楽しめり

布施まさ子

この句は「櫻」に焦点を当てたことで成功しました。まずは「櫻」の高さ、次にその葉が日差しにきらめきながら落ちて来る様子を「空の高さを楽しめり」と置いたのです。

半島の日の足早し掛大根

片桐紀美子

「日の足」は雲間からもれる日光のことです。近景に「掛大根」を置き、そこから退く「日の足」を描きました。すでに「日の足」は半島の鼻の辺りです。なつかしい景色です。

鷗外宛て子規のはがきに春待つ句

仙田 孝子

この句には「鷗外と慶応三年生まれの文人達展」という前書きがあります。子規は慶応三年です。このころの文人達は小説も短歌も俳句も同列に書き、交わりました。その交わり的一端が「子規のはがき」です。「春待つ句」が子規の病を暗示しています。

飴色のどんぐり拾ふ良弁忌

上辻 蒼人

東大寺二月堂の「お水取」、若狭の「お水送り」と深い関わりのある良弁大僧正の忌日は陰暦十一月十六日です。東大寺の辺りでしょうか。ふと風雨にさらされた「どんぐり」を拾い、その飴色に良弁の偉業を想い起したのです。

# 風土集



## 南うみを選

道元は道を語らず冬落暉 水戸 山田 健太

死神の張り付いてゐる日向ぼこ

鷹の羽根郵便受けの中にある

熱爛や握り拳の中は海

たま風に追ひ落とされし面袍かな

短日や足より暮るるバスのりば

夕映えて総門山門冬紅葉

わらぼつち並ぶ里山冬ぬくし

風呂吹に戸締まり早き夕べかな

頬杖を解きて腕組む漱石忌

半島の日の足早し懸大根

枇杷の花かをる裏木戸開けにけり

牡蠣割女時をり海を見てをりぬ

ひとしきり鳥のざわめき落葉山

泥のまま投げ渡さるる蓮根掘り

相模原

岡 尚

平塚

片桐紀美子

豆稲架を残して宇陀の日暮れかな 五條 上辻 蒼人

飴色のどんぐり拾ふ良弁忌

櫟檜里山に冬走り来る

雨ぐせの宇陀の郡の冬紅葉

朴落葉鉛の葉裏翻し

目鼻なきマネキン師走の飾り窓 東京 川田 好子

音高き庖丁さばき日短

風に鳴る玻璃くもらせて根深汁

放たれし言葉かへらず冬の月

咳込みてひとりの闇をおどろかす

新巻の鮭吊るさるる上野駅 京都 杉本葉王子

佗助や少女の口の少し開き

霜柱ザクザクと踏み出勤す

ポインセチアここは青山一丁目

冬菊の温もりのある寂しさよ